

そんな最低な、

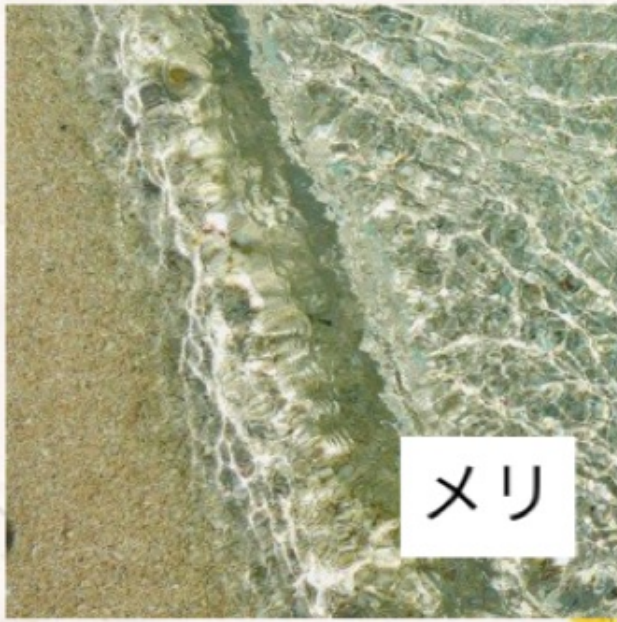


愛すべき日々。

2



メリ



最期の瞬間、

「リラはさあ、俺の物とは言えないよねえ」

「はあ？」

「俺のリラ、って言ったら嘘になるよね」

「当然でしょうに」

「リラは俺が死んだって一緒に死んではくれないよね」

「そうですね」

「俺としたら恋人は、俺が死ぬときその場で即後追ってくれるくらいが理想なんだけど」

「私アンタの恋人じゃないし。てゆか普通その場合、自分の分まで生きてくれとか言わない？」

「映画とかではそうだけどさ、有り得なくない？だって自分が死んだ後も恋人が生きてたら、自分じゃない人を愛して、自分とじゃない思い出を作って、そして自分とじゃない子供を産み、育てて、その子供や孫に看取られて生涯を終えてしまうんだよ？」

「イヤ、その何処が悪いのか理解できない」

「悪いだろ。そうしたら俺はただの過去の一事項でしかなくなるんだ。どんどん忘れられていく。思い出しても貰えなくなる。恋人が幸せな一生を終えるベッドの上では、走馬灯にも出てこない程度の価値に落ちているだろうさ。所詮身近な幸せには過去の色褪せた思い出は敵わない」

「うんまあそうかもしれないけど。で？」

「悔しいだろ。自分が愛した人が最期の瞬間自分の事を思ってくれないのは。しかも自分は早々に死んでるのにしっかり人生全うしちゃったりして」

「最後ものすごく自分本意な意見ね」

「自分に正直なのさ。だから俺がもし自分の愛した人より先に死ぬなら、俺の最期の台詞は"今すぐ俺と一緒に死んで"だな」

「うっわー……」

「まあそれで死んでくれなかったら本当には愛してくれてなかったって事だ、その時はすっぱり諦めるさ」

「え、アンタなら断ったらうむを言わさず道連れにしたりするんじゃ…どちらにしても、重っ」

「まあ理想の話だよ。それで、リラ」

「何」

「俺が死んだら一緒に死んでくれる？」

「その話はもう済んだでしょうに」

「リラの場合は断っても俺が殺して連れていきます」

「やっぱりうむを言わせずなのね」

「だって、嫌じゃん！俺死んだ後リラが人並みな幸せ手に入れてるとか悔しすぎて俺化けて出るよ」

「自分の事しか考えてないわコイツ」

「だからさ、リラ」

「あーハイハイ、どっちみちアンタ当分死にそうもないし、まあ目の前で死にかかってから考えるから」

「俺の物になってよ」

「…理解できないって」

「んー、まあ、つまりは愛を語ったんだよ」

思うのは

「わかった、じゃあ逆の場合の話をしてしょうか」

「ん？」

「私が死にかけてたらの話」

「あー、実際そっちの方がよっぽど有りそう」

「でしょ？」

「うん、車に轢かれたりしただけでサクっと死にそう」

「それは普通に死ぬでしょ」

「え、そう？それじゃなくてもリラベッドから落ちただけで骨折ったりしたんでしょ？」

「昔の話よ。まあ私が先に死んだとして、アンタは後は追わないよね」

「断言しちゃう？わからないよ？」

「てゆか私は後追って欲しくないのよ」

「え、俺には生きて欲しいって？感動的ー」

「死んでまでついてこられたら正直うっとおしいし」

「そっちか」

「アンタは長生きしたところでまともな幸せ手に入れてるとは思えないから悔しくもなんともないし」

「え、なんでそー思うの」

「なぜって、そうね、私が死んだらアンタは私と出会う前の生活に戻るわけだ。女を取っ替え引っ替えしながら適当に生きるの。結果、子供や孫は私の長生きしたバージョンよりよっぽど沢山のさうだけど、家族関係とかガッタガタでしょうね」

「あー……」

「アンタは会社継いでお金はあるでしょうけど、家の中とかドッロドロで、妻との関係は冷めきり、息子はグレ、娘は自分の部下いつの間にやらデキてて、そして最期にアンタが死ぬベッドの周りは愛人や子供や孫が十重二十重に囲んで遺産相続の話とかするんでしょうよ。羨める状況じゃないわね」

「うっわリアル…想像つく…」

「まあ今も女取っ替え引っ替えは変わらないんだし、結局私がいても一緒なんだけど」

「それは違うよ」

「え、」

「愛人沢山いても、大切にしたい人が一人いるかいないかで最低さは全然違うだろ」

「あ、最低って自覚あったんだ」

「反応するのそっち？ あー、でもここまで言われたら意地でも後追ってやりたくなかった」

「やめてよ、私はそんな昼ドラっぽい感じをあの世からニヤニヤ眺めたいのよ」

「いや、追うよ。どーせ地獄落ちっぽいなら一緒のが楽しいよ？」

「なんで私も地獄落ちて決めつけてるの？」

「なんでって、ねえ？」

「なんか腑に落ちないけど…やっぱり後は追わないで生きててよ」

「さっきのリラの妙にリアルな未来予想図のおかげで生きる気力を失ったんだよ」

「しょうがないな。じゃああの世の縁で待ってるからゆっくり来なよ」

「待っててくれるの？」

「確かに地獄じゃ一人よりマシだしね」

「2人なら普通に遊べそうだし」

「隙をみてまた一緒に生まれ変わったりできそうだし」

「ハハ、生まれ変わっても俺と一緒に居たいんだって事？」

「え……」

「つまりこの話を要約すると、この世で死に別れたら別に俺が生きて誰と何してようが構わないけど、また生まれ変わったならその時は会いたって事だったの？」

「……そうっぽい。しまった、私も愛を語っちゃったの？」

「なんだ、両想いだね、俺ら」

かなし

来たときから変だった。

「…京介??」

「……」

夕御飯を作っていたらいつものように京介が来た。

普段ならいつの間にやら作られていた合鍵で(犯罪だよな)勝手に入ってくるのに今日はわざわざピンポン。とチャイムを鳴らされた。料理中で手を離すのが面倒だったし、この時間はどうせ京介だろうと思って放っておけば。

ピンポンピンポンピンポンピピピピピンポン。

連打と来たか。耳障りな事この上ない。

鍵を忘れてもしたのかとしぶしぶ手を洗って玄関を開けた所で。

抱きしめられた。

「どうしたの、」

何かあった、と問い掛けても返事がない。

「とりあえず、中入ろ??」

ここ外だし恥ずかしいでしょ、と言え腕の力が緩んだがまだ引っ付いたままの京介を引きずるように部屋の中に入った。

いつもは五月蠅いくらいにつらつら喋ってる癖に今日は黙り込んでいる京介をかなり苦勞して部屋に運び込み、さてどうしようかと思ったところでそれまで動かなかった京介が急に動いた。

え、と思った時にはベッドに投げ飛ばされていた。

ギシ、と音がして京介もベッドに乗ってきて、私の上に跨がった。所謂押し倒されている状態。

「何、京介」

「……」

「…やりたいの??」

私と、と続ければ京介が目を合わせてきた。

「何でリラそんな落ち着いてるのさ」

「だってなんか想像出来ないし」

「俺は出来るけど」

「え、…困った。」

「嫌??」

「嫌というか、どうしたらいいかわかんない」

別に良いんだけどさ、演技入らない抱かれ方ってイマイチわかんないから、と困った顔で京介に告げると、コイツも困った顔をした。

「だから普段してる感じでいいなら抱かれてもいいよ」

「…それは俺が他の男と同じ扱いみたいで屈辱だね」

「仕方ないでしょ、それしか知らないし」

目の前の京介の顔を撫でてみる。冷えきって強張っている。

「でも別にそれでもいいんじゃない??京介今人肌が恋しいだけでしょう??」

手軽なコが捕まらなかったって事だろう。京介は不安定になると温かい肌を求める。コイツは寒がりだから。

私だって寒がりだったの。まあでも。

らしくもなく意識して優しく微笑み、招くように両手を広げて言ってやる。

「私でも一応今のアンタよりはあったかいわよ」

さあ、おいで?

京介はしばらく黙ってから、キスをした。

割と出合っすぐから何かの冗談のように、触れるだけのキスというのはされてきた。京介はスキップの好きな奴だし、私もそんなに気にしなかった。

でも、今回は。

何回かの啄むかのようなキスの後、舌を絡めてきた。

流石に上手い、コイツ。女タラシの名は伊達じゃない。

本当に抱かれるのかな、と思っているうちに息が苦しくなってきた、京介の胸を軽く叩いた。

「…ッ、ハ、ア、」

苦しげに息をしている間に、京介は服から背中に手を入れ、肌に直接触ってきた。

「…ん、」

くすぐったくて声が出た。マズイ、くすぐったがってる場合じゃない。いつもの感じなら程よく感じてる声を出さなきゃ。

でも、

「ねえ、京介」

「ん??」

「本当にやる気あるの」

さっきから背中を撫でられてる手つきに、いやらしさを感じないんだけど。

「…アンタ意外に下手とか??」

「それ誰に言ってるのさ」

「ファッ、ン…ゴメ」

見くびるな、と言わんばかりに一瞬弱い所を撫でてきた。ビックリして思わず本当の声が出た。

「じゃあ何で」

「んー…リラの肌触ってるだけで気持ちいい」

本当に気持ち良さそうな穏やかな表情を浮かべて背中を撫でている。

「温かいしスベスベ……」

「それだけでいいんだ」

何処かホッとして言った。

「なんか、安心するんだよね。あったかい人の肌に触ると。生身同士で触れ合うのって気持ちいいし」

リラも気持ち良さそうな顔してるよ、と言って顎を擦られる。完全に猫扱いか。

「まあ温かいと眠くはなるわよ、ね……」

「そうだね」

「京も寝なよ」

「え」

「とりあえず何も考えないで、さ」

コイツがどうして不安定なのか言わないなら、私に出来るのは一緒に寝てあげるくらい。

それと、もうひとつか。

「起きたらご飯作るから。何が良い??」

京介はなにか、一瞬堪らなそうな顔をして。

「美味しいものもいい。愛情が籠った美味しいものが食べたい。」

と。

うーん、困った。

「愛情とかはよくわかんないけど、」

と言った所で不敵にフッと笑って見せて。

「私が今までにアンタに不味いもの食べさせたことがあった??」

そう言ってやれば、応えるようにようやくコイツも笑って「無いね」と言った。

それから2人してまるで動物の兄弟のようにただ抱き合っただけで眠り込み。しばらくしてから私が一足先に起きて料理をし始めた。コイツが来たときに作っていた分は時間が経ったせいで残念ながらもう使えなくなっていた。

出来上がる頃に起きた京介は多少バツの悪そうな顔をしたものの、大体いつもの感じに戻っていた。

「リラはさ、噂じゃあんまり付き合った男にもやらせないって聞いたんだけど」

焦らしの間垣ってさ、と京介がシチューを食べながら行った。

「俺はいいの??」

茶化すような目で聞かれた。良かった、いつものコイツだ。

「アンタはまあ、上手そうだし、加減を知ってそうだから」

若い同年代の男なんて経験少なくて下手な上に性欲だけは猿並でまともに相手なんかしてらんない、大体独りよがり野郎ばかりだし、と吐き捨てる。

「そっかあ。俺、本気でリラ犯す気だったけど」

でもさ、と。

「なんかキスしたときとかの反応がさ、意外に初々しくて。怯えてるみたいだったから」

なんか続けられなくなった。そっか割と経験なかったのかと納得したように続けられるのが無性に悔しくなって、

「ハ、チャンス逃したわね。二度目はないかも」

「え、ちょっと」

「今回は気まぐれに付き合っただけ。相手見つからなくて萎れてる可哀相な京介君に」

フン、と冷たく言ってやれば、

「え、イヤ、相手いなかったとかじゃなくて」

慌てたように京介が言う。

「俺はリラ抱きたいと思ってたよ、普段も！我慢してたけど!!」

「えーアンタみたいな性欲魔人が我慢してたとか信憑性薄…」

思いっきり胡散臭そうに言ってやる。

「本当だって。イヤでも触っちゃったから今後我慢出来る自信ないかな。だってリラ意外に敏感…」

「へえ。出来る出来ないに関わりなく我慢するのね。」

「ちょ、リラ」

「私はアンタのセフレになった覚えはないわ。心配して優しくすれば付け上がっちゃって」

「…心配してくれた??」

「ちょっとは」

そういうと本当に嬉しそうに笑った京介を見て、ホッとしている自分がいることを確認した。

正直、肉体関係が出来たとしたってコイツとの間は何も変わらないようにも思うしどっちでも良いのだが。

焦らしてやった方が面白そうだし、まあしばらくはこんな感じの関係で良いかと、シチューの温かさに目を細めながら心の中で呟いたのだった。

ある日の会話：テーマは家族

「ゲ、これ親のサインが必要なのね。」

「いない本売るだけで？未成年者は不便だよな。俺書こうか？」

「あー、お願い。それっぽくね」

「任せろー。…こんな感じ？」

「上手い上手い。寧ろ本物より上手い。こんな平凡な名前に合わないくらいの達筆」

「間垣和夫さん。確かに平々凡々な名前だな。角顔で黒縁の眼鏡掛けてて無趣味で休日は家に居てたまにはパチンコに行ったり。えーと40代後半くらい？なら会社の役職は部長補佐ってトコか。そんなイメージ」

「ピンポーン、大正解」

「マジで？なんて捻りのない人生歩んでるんだ和夫さん」

「ちなみに母親は間垣好美って名前」

「んー、結婚する前はそこそこ人気のOLで、寿退社後は専業主婦。時々ママさんバレーなんてしちゃったり。服の趣味は洗練されていない。日々の生活の平凡さに少し飽きていて、子供を育てるのがだけが生きがい。て事はリラには割と素直な兄弟がいるはず。好美さんは多分俺の趣味の範囲外な感じだな。」

「最後の台詞は余計だけど、大体合ってるよ」

「2問連続正解か。ある意味理想的なくらい個性を感じさせない夫婦だね間垣夫妻。…ってそんなトコからなんで、この間垣リラが生まれる訳？気のせいかな名字の印象まで親子で違わない？」

「子供に生まれる場所は選べないから」

「身も蓋も無いね。でも本当にそんな面白みのカケラも無い家で育つのかこのリラが。見たかったなー、正に肥溜めに鶴だったろうね」

「別に良いけど人の家庭環境を肥貯め呼ばわりか。でもそこで鶴じゃないフリをしてあげるのが親孝行ってものよね」

「で、程よく良い子で過ごしながら、裏では全力で家を出る道を探ると。だから高校から一人暮ら

しだったのかー。」

「わかってるじゃない。そりゃあもうあらゆる手を使って親だまくらかしたりしたわ」

「うーん歪んでるね！」

「そんなことないわよ。実に愛情に溢れた生暖かい家庭で家族仲も良かったから、私がまともに育つ事が出来たのよ？」

「まともに……」

「アンタこそどうなのよ」

「何が？」

「物心ついた時から母親いないんでしょ？アンタがこんなに女にだらしないのって、幼少期に母親の愛情が不足していたが為に人格形成が阻害され、成長してからその代償行為に……」

「うわぁ尤もらしく有りそうな精神分析しないでよ。愛情足りなくなかったって。俺は望まれて生まれたんだからね」

「ええー……。信じられないけど」

「本当だって。じゃあ話すよ、信心深い父親の切実な願いを神が聞きとどけた、奇跡と感動のストーリーを」

「わー、胡散臭い」

「俺は親父の最初の妻の子供だから、親父にとっては初めての子供だったんだ。初めて子供を持つにあたって親父は流石に不安になったのか、十字を切り、こう祈った。ああ神様、僕に子供が生まれます……」

「アンタのお父さんってキリスト教徒だっけ」

「僕と妻との初めての子供です。しかし問題があります。僕は子供が大嫌いです。見るのも声を聞くのも嫌です」

「え」

「素早く動き回る小さな体！耳障りな高い声！愛情を欲するあの潤んだ目！思慮のカケラもない本能的で汚らしい行動！寒気がします！しかし愛人との子供ならまだしも正妻との子ですから僕が関わらない訳にもいきませんし。」

「えー……」

「そこでお願ひがあります。どうか、どうか神様、僕に子供らしくない子供を下さい。手をかけなくても勝手に育つような、親？アハハ所詮は他人だよね的な、そんな可愛げのカケラも無い子供を下さい。無邪気さなんてクソくらえ！

それで長男なら会社の跡取りなんで、頭の出来も良くないと不味い。尚且つ見た目も見苦しくない程度に整ってるのが望ましいな。鼻垂らして馬鹿みたいな顔したクソガキなんて美観にそぐわないものを家におきたくありません。

正直人間性は多少歪んでいても気にしません。いや性根の悪さなんてホントどうでも良いです表に出さなければ。寧ろクソ真面目な融通きかない堅物よりよっぽどそっちのが愉快で良いですね。

そんな感じでどうかお願いします。神様、貴方は偉大なり！

と、親父は信者の人に『軽々しくするんじゃねえ』と殴られそうなお祈りをキチンとメッカの方角を調べて行った」

「……ん？」

「それで生まれたのが俺だった訳だ。成長のかなり早い段階から、親父には自分の望み通りの子供だと解った。そこで親父はすぐさまへりで島根県の出雲大社まで飛んで行き、正式に二礼四拍手一礼して感謝の気持ちを述べた」

「……」

「おお神様、ありがとうございます！僕はあなたを愛しています！！そして、さあ次はインドか、と思ったが、部下に『これ以上仕事サボらないで下さい』と泣きつかれ、しびしび西の方を向いて正座し、仏陀を讃えて般若心経を3回唱えようとしたが、足が痺れて1回半で止めた」

「……信心深いっていうか、トータルで考えると明らかに罰当たり？」

「多方面に信心深かったのさ。という訳で俺は親父の理想的な子供だから。愛されてるよ」

「！そんな罰当たりな行いしたから天罰下ってこんな悪魔が生まれたんじゃ……！」

「アハハ、悪魔の子供が悪魔なのは自然の摂理さ」

ある日森の中で出会ったクマさんのお話

親父が愛人に渡して当然ながら突き返され、「ああどうして受けとって貰えないのだろうかこんなにも可愛らしい物に託した僕の愛情を！モノが大きい分籠めた僕の思いも大きいというのに！」と歎きながらそれに抱き着いてオイオイ泣いている姿を見て、これに似合うのはこんなオッサンじゃないよなー、と思ったらあるプランが閃いた。そしてそれから親父を引きはがし、それを担いで一路リラのマンションに向かった訳だ。

着いて部屋の外から伺えば狙い通り電気は消えていてリラは就寝中の模様。まあ現在時刻は深夜3時12分だから当然だけど。訪れるのに非常識な時間だとか常識的な突っ込みはこの際スルーだ。

合鍵を使って静かにリラの部屋に侵入。そして寝ているリラを起こさない様に細心の注意を払って近づく。リラは一人の時は割と深く眠る質だが、気配に聡い為にそれも出来るかぎり消して。

そうしてベッドに横たわるリラを見下ろした。うん、計画通りいつもの姿で寝ている。リラは一人で寝る時はいつも横向きで布団を抱き込む様にして眠っている。ぎゅう、としがみついて、更にそこに顔を埋める様にして。その細い身体には脂肪が少ない分寒がりらしい。

少し様子を伺い深く眠っているのを確認してから持ってきたそれを持ち上げた。

それとは、体長1メートル半程のクマ。ツンと尖った鼻につぶらな瞳、丸い耳の内側はピンク色。フワフワの毛に覆われた体に、首には赤いリボンが巻かれている。まあ所謂テディベアだ。起源は確かルーズベルト大統領の…ってそれはどうでもいいとして、とりあえずいい歳してこんな恋人に渡そうとしていた親父がどうかしてるよなって話。

まあそれはそれとして。

リラの抱えてる毛布をそーっとその手から外しにかかる。ん、と唸ってリラも無意識に抵抗するけど時間をかけて慎重に動いて、なんとか外させる事が出来た。そして空いたスペースに代わりにクマを設置。

すると寝ているリラは無意識に無くなった毛布を探すように手を動かし、そこにあったクマに触れると引き寄せられる。そして元々毛布にしていたようにぎゅうっと抱きしめ、そのクマの尖った鼻先の下辺りに顔を埋めた。

作戦完了。

うん、これぞ正しい姿だよな。

愛らしいクマに抱き着いているべきはけしてムサイ中年のオッサンじゃなく可愛らしい女のコ。それが世界の定理ってものだろう。たとえそのコの中身が今時の軟弱な男共よりよっぽど男前、尚且つものすごく腹黒かったとしても、見た目さえ良ければ何の問題も生じない。

うん眼福眼福。親父のお陰で汚された目の良い保養になったよ。

一人で満足しながらその完成図を眺める。そんなことは露知らず、リラは呑気に寝息をたててい

たが。

「…ん、ん…」

目を閉じたまま眉を潜め、小さく唸った。

あれ、寒かったかな。

毛布を奪う時に少し捲れてしまっていた掛け布団を肩まで引き上げてやる。

そっとやったつもりだったが先程からの色々な動きの為もあってか、閉じられていた瞼がゆっくりと開いてしまった。

あーあ起こしちゃったか。

今は寝ぼけたようにぼんやり瞬きを繰り返しているが、すぐに覚醒してしまうだろう。目の前に見慣れないクマがあるし、第一俺がいる。他人の気配がする中で呑気に寝ていられるような気楽な性分じゃないのだ、このコは。

他の人間ならきっと部屋に入った時点で起きただろう。俺はベッドまで起こさず来られたけど、俺だって他人であって起こしてしまう事には違いはない。

今も多分、すぐに驚いて覚醒してから「なんだ京介か。勝手に入るなって言ってるじゃない」とも言って口を尖らせる筈。

そう思い、出来るだけ驚かせないで済むように静かにリラ、と呼びかけてみる。

すると。

寝起きで意識がまだハッキリしていないらしくゆらゆらと定まっていなかった視線が、その声で俺を見つけたのかゆっくりと俺を捉え。

リラは、ゆるりと微笑んだ。

とてもとても嬉しそうな、安心したような顔で。

そして、その笑顔のまま唇が「きょう、」と声に出さずに俺の名前を形作ったのが視界に入ってきた瞬間。

何か考える前に反射的に腕が動いた。

動いて、目の前の頭を撫でる。

何も考えないで取った行動に自分でも意味が解らず、そのリラの頭を撫でて自分の手を眺めるうちに、ようやく感情が追いついてきた。というより、ようやくその時点で自分の行動の原因となった感情に気付いた。

可愛い。可愛い。

このコが可愛くてたまらない。

嵐のように俺の頭を駆け巡ったその感情が、俺の腕を動かして頭を撫でるという一般的に何かを可愛がる時の行動を取らせたい。

"可愛い"という感情はさっきクマに抱き着いているリラを見た時にも思った同じものの筈なのに、

何故か全然違う想いに感じた。それは今までに感じたことのないような。

自分で感じている感情に戸惑っている間にも俺の手はサラサラとしたリラの髪を撫でていて、リラは猫のように気持ち良さそうに目を細めた後、そのまま瞼を閉じてまた眠ってしまった。またクマに抱き着き、幸せそうに頬を擦りつけて。

それにまた"可愛い"とってしまった俺は正直、途方に暮れた。 .

朝になり今度は本当に目が覚めたらしいリラの身動きする音にソファーに倒していた体を起こしてそっちを見ると、寝起きで上手く回らない頭で何故自分のベッドにクマが寝ているのか考えているようだった。

「おはようリラ」

「…おはよう京介、昨日アンタを家に招いた覚えはないんだけど」

「アハハ嫌だな寝ぼけてるんじゃないか？」

「そうね、じゃあクマと同衾しているこの状況の原因も私が寝ぼけているせいで思い出せないのかしら？」

「きっとそうだ、困ったねー」

「…白々しいにも程があるわよ」

ふわあと欠伸をしてからリラは見知らぬクマを押しつけて起き上がったが、俺が見ているのに気付いて言った。

「私の顔に何かついてる？」

「いや…ねー、夜に俺が来た時のこと覚えてる？」

「それが問題よね。アンタが侵入してきたのに起きなかったなんて無用心にも程があるわ」

「覚えてない、か。本当に寝ぼけてたんだな」

「え、起きたの私」

嘘、だって覚えてないわよアンタの目の前で寝ぼけてるなんて危ない真似するはずないわよ、と不審気に続けられて、まあそうだろうなと思う。もしや昨日のアレは俺の夢だったのか。

少し考え込む俺に不思議そうな顔をして、リラはちらりと目の前に転がるクマを見下ろす。

「でもそういえば、夢にコイツ出て来たわね」

「え、じゃあやっぱり一回起きてコイツを見たんじゃないの。どんな夢？」

「えー…ベースは童謡の森のくまさんで…でもこのクマの台詞は『見た感じ君、銃を持ってないみたいだけど逃げなくていいの？』だったし、私は白い貝殻のイヤリングを落とさないし、だから最終的にお礼に歌ったりって展開もなかったし、日本のじゃなくてアメリカの原曲の方ね

、きっと」

「『逃げなくていいの？』か。それでリラは『それは良い考えね』って言ってスタコラサッサと逃げたの？」

原曲ならそうなる筈だ。

「いやだって原曲ならアメリカだから出会うクマは体長3メートルのグリズビーとかなんでしょうけど、夢の中じゃ所詮このフワフワモコモコだし。怖くないから『別に逃げないわ』って言ったのよね」

このフワフワモコモコ、の部分でクマを掴んで「邪魔。」とベッドの下に投げ落とす。こんな所が男前というか。

「一応クマなんだから逃げとこうよ。それで？」

「それがねえ」

リラは思い出して微妙そうな顔をする。

「俺は君が欲しいんだ。でもそれは君の為にならないよ。だから逃げて」

こんな可愛らしい図体で一端の台詞を吐くクマだと思った。
サイズが大きいだけの所詮はテディベアでしょうに。

「アンタなんかはどうこうされる私じゃないわ。ナメてるの？」

そう笑って言ってやると、クマはなんだか泣きそうに顔を歪めた。縫いぐるみの癖に表情豊かだねコイツ。

「逃げてよ、リラ」

そんな苦しげな声は聞いた事ないと言うのに、何故か京介を思い出した。

「逃げないわよ」

だって。

「だって原曲通りなら最低高さ3メートルの木の枝までジャンプしなきゃいけないのよ？そんなの無理だし」

「そんな理由か」

ガクっとうなだれて見せると、オチもついたのでこの話は終わりだろうと思ったのか、リラは立ち上がってコーヒーを煎れ始めた。カップが2つあるから俺の分も煎れてくれるらしい。

コーヒーの香りが漂ってくる。

「なー、リラ」

「んー？」

「"可愛い"って感情の最上級形って何だと思う？」

あれから考えて出た結論は「あの未知の感情は『可愛い』と思う気持ちと近い性質だがそれよりもっと強い何かである」だったので。

俺の質問にリラは少し考えているらしく、煎れたコーヒーをサーバーから移すコポコポという音だけが静かに聴こえた。

「…"愛しい"、かな」

愛しい。

…愛しい？

「えええー？」

心底納得いかないという声を出すと、リラも

「何、この答えが何か不服なの？」

と不満げに言うけれど。

だってそれじゃ俺がリラを愛しいと思ったって事になるじゃないか。

有り得ないって、女は顔じゃないよ、中身中身。って本当はそんなこと今まで思ったことないんだけどさ。

これは何かの気の迷いに違いない！というよりこのクマとのコラボレーションの威力か？そもそもこのクマ、親父が愛情籠めたなんて言ってたんだから何か呪いの的な…。怖っ！

しかし俺まで惑わせるなんて恐ろしい女、そしてクマ。

「そうだ、全てはこのクマだな」

「…よく解らないけどそんなに愛しいクマなら持って帰りなさいね？邪魔だから」

訳の解らないらしいリラは両手にカップを持ったまま、呆れたようにそう言ったのだった。

コインを投げて

「あー、参ったな。コレって所謂修羅場なのか。」

新しく引っ掛けた女のコ(サキさん、女子大生)の家でイチャイチャしていたら、来たのはこのコの彼氏さん。

「サキさんもね、悪気とか無かったと思うよー？ただ君には勿体ないくらい見た目だからさ、君みたいな平凡極まりない男と付き合ってるや、そりゃ時々は魔がさして他の男と遊びたくなっちゃってもしょうがないってー。」

その彼氏さんとやらは優しさが唯一の取り柄です。みたいなまあ男の俺が言うのも何だけど今流行りの草食系男子ってヤツか。大学の適当な運動系サークルとかに所属してて適当にバイトもして遊び代くらいは稼いでて程よくチャラくて可愛い彼女もいてみたいな。日本全国に何千人といそうな没個性君だ。

その没個性君は彼女の家行ったら男が居ました、みたいな緊急事態に頭が真っ白になってるらしく、さっきから俺が割と好き勝手に言っても無反応。

「俺は別にいいよ？こんな女のコー人取り合うとかでそんな修羅場とか面倒臭いし、てかこのコも見た目だけで中身は無いようなもんで面白くもなかったし喜んで返すよ。うん、平凡同士お似合いなカップルなんじゃない？」

急な彼氏の登場で青くなって黙ってたサキさんはそこで顔を上げてちょっと今のどーという意味？と反応した。

ああ、今の日本語の意味を正しく理解出来る程度の頭はあったみたいだ。

「イヤ言った通りの意味だよ、こんな鈍そうな彼氏に浮気現場押さえられるなんてアンタも迂闊に過ぎると思うし？ところでおにーさん聞いてるー？目えトんでるみたいだけど大丈夫？そんな訳で俺は退散するから後は二人で好きにしておいてよ」

それまで一言も発しなかった彼氏さんは「おにーさん」という単語に反応したようにそこで初めて俺をよく見た。俺は学校帰りの制服姿。

制服＝高校生＝年下。

あ、今この人の考えてることキレーに見えた。

「ちょっとそれは無いんじゃないかね？人の女に手え出してそのまま帰るとかさあ、高校生の分際で」

おお、年下と見たら急に強気。

「えー、困ったなあ。それじゃ、1発殴りでもしたらスッキリするとか？」

そこまでベッドに座っていたのをスクッと立ち上がって彼氏さんの目の前に立ってやる。座って判らなかつただろうけど俺の方が優に10cm以上背が高い。それを見てまた彼氏さんはビビったようだ。根性ないなあ。

「俺はそれでも良いけどさ、ただ俺ね、男に殴られるのは慣れてないからつい反射的に殴り返しちゃうかもよー？」

どうする？と首を傾げてみれば明らかに怖がったらしい彼氏さんが後ずさった所だった。

ちょろい、このまま帰れるな。

そう思ったら

「ちょっと、こんな年下にコケにされて黙ってる気！？」

とサキさんがそれは恐ろしい表情で彼氏さんを睨みつけて、彼氏さんは小さくヒッと漏らした後慌ててまた俺に向き直った。あれ、サキさん浮気見つかった所なのに開き直ったのか強気になっちゃった。彼氏さんもなんで引いちゃうかなあ、情けないな、この人。

「やっぱただでは返せない？でも痛い思いするのは君も嫌でしょ？本当に困ったなあ。あ、じゃあさあ」

ポケットから十円玉を出して。

「運に任せるってのはどう？そうだなあ、コレ投げて表が出れば土下座して謝ってあげるから」

ちなみに10って付いてる方が裏だからね、と確認。コレが肝心だ。

「俺が勝った時はただ帰らせてくれるだけでいいよ？」

さあどうする？と聞いてみる。答えは判っているけれど。

殴られるなんて絶対嫌だ、というか人殴る度胸もなさそうな情けない彼氏さんは即乗ってきた。サキさんは少し不満そうだが「大丈夫だって俺運良いし、生意気な高校生が土下座するところ見てやろうぜ」と説得している。

運にしか頼れないとは本当に情けないヤツだ。どことなく自信有りげに話す様がまたカッコ悪くて泣ける。

「じゃーそうゆう事で良いー？10の方出たら俺の勝ちね？」

軽一い笑い方と口調で確認してみると結構自信ありげに頷かれた。そんなに人を疑うことを知らないなんてやっぱり善人ってヤツなんだろうな。愚かなる善人。

まあそれはそれとして。

こうゆう小技は如何に疑う余地を与えず、かつ格好良くキメられるかが腕の見せ所だ。

正式ルールに則って親指で弾いたコインを高速で回転させつつ高く上げ、落ちてきた所でパシんと音を起てて左手の甲と右手の平で挟んだ。落とすなんてヘマはする訳無い。

そしてゴクリと唾を飲み込む2人の目の前に手を突き出し。もったいつけるように笑いながらゆっくり被せた右手を退けてやる。

出たのは10の面。裏。勿論俺の勝ち。

彼氏さんはかなり落胆し、サキさんはそんな情けない自分の彼氏をギロリと睨みつけた。あー怖。

「あー、残念だったねー。彼女に浮気された揚句に運命の女神にも見放されて？まあそんな事もあるって。ドンマイ。それじゃー約束通り俺は帰りますんで。」

完全に面白くなさそうな顔してるけど賭けは賭け、黙って見送ってくれるのは日本人的律儀さ、現代の若者にも失われていない美德だなあと感動する。

それじゃお幸せに一。と願ってもいない台詞を残して帰っていった。

やっぱりちょろかったか。つまんないな。

☆☆☆

その後リラの家に行ってその話をしたらふーん、と興味なさそうな返事だった。

でも夕食後、「リラゲームしよーよモンハン」「イヤ私F1みたいから」「…リラスピード狂で外人顔好きだもんね、イヤでも昨日狩れなかったヤツリベンジしたいんだって」というくだらない争いになった時にさっきのコインので決めよう、と言われたので「裏が出たら俺の勝ちね？」と断ってからリラの目の前でやってみせた。

結果はまた裏。俺の勝ち。

だがそこはリラ、甘くはない。

「ちょっと、その十円見せて」

大人しくリラの手に乗っけた。

「…やっぱりね」

「そう、手品用のギミックコインだよ。良く出来てるでしょ？」

コレは両面同じ模様。裏しか出るわけがない。

「なんか製造が法に触っちゃうらしくてさ、すぐ流通禁止になったんだけど、ちょっとこの間手に入って」

触ると結構直ぐ解るんだけどね、と付け足す。

「結構便利だよー。確率2分の1だと思い込んでるからみんな馬鹿みたいに乗ってくる。疑いもしないしね」

リラもよく一回で解ったね？と言うと、

「アンタが殴られるなんてリスクを50%も背負うわけないでしょう。」

しかも私がアンタに運で負けるとも思えない。と言って興味を失った様にコインを放り投げてから、勝手にリラが見たかった番組にチャンネルを合わせた。

「イヤ、リラだって本当に運が良いだけじゃなくて技術も使ってんじゃ…」

くじ引きの時とか怪しいよねー。と言うと、

「まともにやって勝てないならまともにやらなきゃ良いのよ」

とサラッとされた。

「だよね」

それは俺の哲学でもある。と頷いて。

「あんな情けない男にはまともにやっても勝てるけどさ」

「でも殴られるのは嫌なんじゃない？」

「女の口にならまだ良いけどさ、男なら苛つく。しかもやっぱり顔はねえ……」

悲しむコ沢山いるしねえ、と言えばアハハそーですか、と流されて、その後はリラの見たかったF1を「レッドブルギッスギスしてるねー」とか言って笑いながら一緒に見ていたのだった。

夢の通り路

気がつくと、道を歩いていた。

普通のアスファルトの細めの道路、両側には民家や商店が立ち並んでいる。規則的に電柱が並び、その上の青空には大して多くも少なくもない白い雲が浮かんでいる。

ああ、夏の昼間なのかな。

視界がやけに明度が高くて白っぽいし、小さな太陽がほぼ真上でキラキラと光っている。なのに不思議と暑くはない。

「あ、来たね、リラ」

声がしたので見ると隣に男が歩いていた。

「うん、久しぶりだね京介」

誰だろうと思っていたはずなのに口から勝手に声が出ていた。

「前からは何年経ってんだろうねー。景色は結構変わってるみたいだけど。」

「何十年とか経ってるはずだしやっぱり変わるって」

「そういうものだね。生まれるたびに全然違うさ、時代も世界も」

そう言って少し隣の男が黙ったので。

もう一度周りの景色を見てみた。白っぽい世界には私たちの他には誰もいないみたいでひどく静かだ。町並みに見覚えもない。

「私達って何してるの？」

「海に行くんだよ」

「歩いて？」

「うん、歩いて」

「遠くない？」

「遠いのかな？まあ朝までにはつくさ」

何か変な気もしたが。

特に気にならなかったのでふーん。と言っておいた。

「この世界はずいぶん平和みたいだねえ」

隣の男がまた話し出した。

「少なくとも銃弾が飛び交うような世界ではないよ」

「そんな世界で暴れてたこともあったしね。ふーん、平和なのか。じゃあ今度は俺らもっと長く一緒に居れるのかな。なんだかんだいつも会ってから数年でどっちか死んじゃうしねー。」

「だからこそこんなずーっと一緒にいるのに飽きないとも言えるんじゃない？」

「アハハ、それもそうか。でもおばあちゃんになったりラも見てみたい気がするけど」

「そうになったらアンタも年取った姿私に晒すんだよ」

「大丈夫じゃないー？きとお互い綺麗な年寄りになれるよ。ロマンスグレイっていうか？」

「年取れたらね」

自分でも何話しているのかよくわからないが、なんだかそれで当然のような気がしたのでそのまま話しながらガラガラと歩き続けた。景色は大して変わらない。

「リラその姿14か15ってトコ？」

「うんそのくらい」

「年もとらないけどもっとガキの時にも会えないよねー。今までもせいぜい10代から20代くらいまでなんだよな」

「アハハなんかの呪いだったりして。」

「それありうるよなー。身に覚えがないけど。でもそれにしちゃ何回生まれても前の記憶持つてるわけでもないし。別に派手なことしてないよねえ。世界征服とかさー」

「世界征服！一回くらいしてみてもよかったかもね」

「ねえ。まあもうこんな時代じゃ無理かな」

いつのまにか道は上りになって来ている。

「この時代の俺は今何やってるかなー」

ふと思いついたように京介が言った。

「私と会う前のアンタなんていっつも女と遊びまくってるよ」

「たぶんそーだろね。まあ暇なんだよりラに会えるまで」

「私はアンタに会うまでの平和さを噛み締めてるよ」

「うーんでも夢に出れるってことはたぶんもうそろそろ」

「夢？」

立ち止まった。

「なにしてんのー。ホラ、海行かなきゃ」

立ち止まった私の手を引っ張ったので私もまた歩き出した。

「そういえばなんで海行くの？」

「リラ行きたくないの？海」

「そんなわけじゃないけど」

「じゃあいいじゃん」

やっぱりなんか変な気がする。

「どこの海がいい？アドリア海とかグレートバリアリーフとかいいよね、綺麗で」

京介が呑気に言う。

「ここ日本じゃないの？」

「そうだけど、ほら海って全部繋がってるから大丈夫なんだよ」

やっぱり意味がわからない。

「海だけはどんなに時代や世界が変わっても変化が少ないからちょうどいいんだよ、で、何処がいい？」

「...じゃあハワイのオアフ島で」

「了解一。じゃあそこの曲がり角曲がって」

曲がればそこはいきなり道が舗装されていない土の道で、両脇にはヤシの木が生えハイビスカスが咲き、南国特有の甘い匂いが漂っていた。やはり全体的に白っぽかったが。

「はいオアフ島。うん此処からなら海も近いねー。」

平然としている京介とは反対に呆然としてしまった。

ちょっと待ってコレどう考えてもおかしいでしょう、本当に夢みたい、てゆうか、

「コレ夢じゃん」

一気に気がついた。そういえば自分自身の姿を上から見るような視点になってるし。

「あ、気づいちゃった？じゃあ今日はここでお別れだね。もうちょっとだったんだけど。ホラあそこ。」

気づけば下り坂のずっと先にキラキラと夏の太陽の光を受けて輝く海が見えた。

「あそこまで行けばまた会えたんだけどねー」

ちょっと残念そうに京介が言う。

私はなんだか取り返しのつかないことをしてしまったような気分になって少し焦っていった。

「もうちょっとだし、あそこまでなら起きずにいけるよ」

「イヤ、もう無理だよ。でも大丈夫、近いうちに本当に会えるさ。」

そう言う京介の顔を見ようとしたが、もうその顔は白くぼやけていてハッキリしなかった。驚いて彼の名前を呼ぼうとしたのに、なぜかさっきまでは普通に呼んでいた彼の名前が思い出せない。そのことがひどく悲しかった。

「ちょっと、ねえ待って、」

「んー、そんな悲しそうな顔されちゃうと俺も辛いな。大丈夫だよ、起きたら夢のことなんて忘れるんだからさ。じゃあまた、リラ。今度は海に着けると良————」

その声もどんどん遠くなり、その代わりピピピピ...という音がどんどん近づいてきた。

パチ、と眼を覚ますとそこは自分の部屋のベッドの上だった。

とりあえずけたたましく鳴る目覚まし時計を止め、少しぼーっとしていた。

なんだか夢を見ていた気がする。海、に行こうとしていたのだったか。隣でずっと話していたアレは誰だったのだろうか。なんだか酷く懐かしいような気がしたんだけど。

少し気にはなったが、学校に行く頃にはもう全て、忘れていた。